

No.19 March 1995

特集 戦後50年と宗教

Womanpower



フェミニズム・宗教・平和の会

もくじ

特集 戦後五十年と宗教

戦時下における仏教者の二つの姿	小澤 治 慧	2
戦争暴力を廃絶する責任	田 中 良 子	7
国際的市民ネットワークの発展を願って	岩 田 澄 江	10
強制連行と戦後五十年	斉 藤 七 子	13
宗教と戦争責任	渡 辺 秀 子	16
女と国家―観念による呪縛―A『古事記』(十五)	河 野 信 子	20
禅仏教グループとの出会いと別れ	鹿 毛 よ し 子	21
曹洞宗寺院の内側から	川 橋 範 子	25
「錯信帯」と文化の歪み	加 古 美 華	28
第十八号を読んで		
(1) 姉妹よ、怒りを燃やそう	鶴 岡 瑛	32
(2) アンケートへの感想	石 川 信 子	36
一九九四年活動報告		39
一九九四年会計報告		39
編集後記		40

表紙台字 松尾紀子／シンボルマークは「霊」を表す象形文字です。

戦時下における

仏教者の二つの姿

小澤 治 慧

私は、法華経信仰に入ってから、約十年程になるが、その間、抱いた幾つかの疑問について述べることから始めたい。

まず第一に、少なからぬ寺院に於いて、朝夕のお勤めで唱える回向文の中に「五穀豊穡・万民安楽」などと並び「皇室御安泰」という言葉が挿入されていることである。同じテキストを持つ個々の信者が口にするだけでなく、法要という公の場に於いても、この回向文が唱えられていることになる。発行年月日をみてみると確かに戦後のものではあるが、恐らく戦時中に教育を受けた年代の僧侶により作成された回向文と考えられる。こうしたものが何の疑問も抱かれず、未だに各寺院で日常的に用いられているという現象、その中に既成教団、日蓮宗の体質が覗く。

もっと極端な例もある。

お盆の頃行われたあるお施餓鬼法要の際、七十代とおぼしき僧侶が、法話の中でこんな発言をした。「教

育勅語は法華経の精神そのものです」。私はわが耳を疑った。驚きのあまり周囲を見回し、檀信徒の反応をみようとしたが、誰も何とも思っていないようだった。

又、信行道場で一緒だった人からもう年賀状に嘸然としたこともある。数年前夫が大きな寺に入り、貫主と呼ばれることになった彼女は、自分の名前の肩に「大奥」と書いてくるようになったのである。その時代錯誤としかいいようのない感覚にはとてもついていけないと思ったものである。

こうした類の幾つもの驚きが、「寺院」という世間から隔絶した空間に住まいする人々とのつき合いにより、重なっていた結果、私はこの頃では、次のように達観(?)することになっている。既成教団に属する寺の中には、私の求めているような《仏教》は存在しないのではないかと。(政治権力によりつくりだされた)檀家制度によって支えられる現在の寺院仏教にそれを求めてもしょうがないという見方もあるだろう。しかし、私が師とする日蓮は、鎌倉新仏教の祖師方の中でもとりわけ、権力に対し徹底した批判行動をとり、迫害の中で、自分の思想を練り上げていった宗教者である。その信仰を伝えるべく僧侶となった者たちが、現在どのような信仰を持ち、どのように宗教者として行動しているのかは、私にとって、決して蔑ろにでき

ない問題ではある。

ところが、「南無平等大慧一乗妙法蓮華經」と唱えつつ、それと全く反対のことを言ったり行ったりしている僧侶がいかに多いことか。そこには、もし真摯な宗教者であろうとすれば、当然おかしいと感じる様々のことがらを何の痛みもなくやりすごしている僧侶たちの日常がある。それはおそらく戦前からの流れの上に形づくられてきたものであろう。戦争責任の反省——など考えたこともなく、戦時中自らの果たした役割に全く無頓着なまま、戦前と変わらぬ土壌の上で職業として僧侶をやっている姿と考えた方が良いのかもしれない。

そこで、日中戦争から太平洋戦争に至る昭和期、日蓮宗が如何なる役割を果たしていたのかを調べてみた。「大東亜戦争下における日蓮宗の動向」とくに立正報国運動について——石川康明」によると、日蓮宗は、第一に「勅額奉戴」にみられる如く、天皇制に密着し、これに奉仕することをその根底においてきた。この点では、日蓮遺文「神（日本の神々をさす）は所従なり。法華經（久遠釈尊）は主君なり」に明記された王法より仏法が尊いとする価値観を全くふみにじるものであった。

第二に、朝鮮「伝道」から中国「開放」に向けての

布教活動（これは立正興亜運動へと引きつがれる）に力を入れている。その教義的根拠とされたのが、今でも日々、回向文で読まれる一天四海皆帰妙法の一句である。法華經の拡まっていく様子を描く文句が海外侵略の道具に使われたわけである。

第三に「立正報国」及び「立正興亜」をスローガンとする翼賛体制への協力と宗門戦時体制化に宗門を挙げて取り組んでいた。（ちなみに現在は「お題目総弘通運動」がスローガンである）

昭和十二年の日中戦争開始により、近衛内閣は、挙国一致、尽忠報国などのスローガンのもと強力な「国民精神総動員法」を展開していく。その翌年、三月、「神・仏・基三教協議会決議」が出され、「国民精神を国策に奉仕せしめる責任の軽かざることを感じ、国民の信教の深みから国民動員へむけて一致協力する」ことが誓われている。四月、「国家総動員法」の施行と続き、勅令により戦争遂行のため人的、物的資源の全てを動員できることとなった。十一月には、「東亜新秩序建設」の帝国政府声明が出されている。

昭和十五年に至り、全政党が解散され、「大政翼賛会」を組織した天皇制ファシズムは軍部を使い、翌十六年、各宗合同をなしとげ（十三宗二十八派）仏教界翼賛体制をつくりあげる。この後、戦争終結まで、

宗教報国の名のもと、仏教界は、大東亜共栄圏建設のため皇国宗教として大きな役割を果たしていく。

日蓮宗の寺々でも、「米英撃滅必勝祈願」を掲げた法要が行われ、花まつり、唱題行、寒修行といった寺の行事は戦時色一色に塗りつぶされていったのである。

こうした戦時宗教総動員体制の前提となったのが、昭和十四年に制定された「宗教団体法」である。政府はこの法律によって、「国民精神総動員と占領地での宣撫、即ち戦争を有効に遂行するための心理戦、思想戦へむけての十分なる活動」を宗教に求めている。

ペーター・フィッシャーは「宗教団体法（昭和十四年）と日本のアジア大陸侵略との関連」の中で、次のようなことを指摘している。「日支戦争の際に、日本政府が国中の宗教をも宗教団体法で、心理戦或いは思想戦に巻き込み、それを利用せんとしたことは、容易におわかりのことであろう」「占領地に於いて、いかなる宗教を宣布しようとも、その任務はすべて同一であった。・・・宗教を通じて、日本国家の支配イデオロギーを原住民の頭と心に植えつけることであった」彼のいう如く、宗門も様々の言説を弄して国民に天皇制国家のイデオロギーを叩き込んでいった。その幾つかを当時の日蓮宗宗報から紹介しておきたい。

「日蓮聖人は・・・三大誓願を立てて宗教家の立場から減私奉公の大忠を実行せられ・・・一、懸命の題目・・・皇軍の大勝をお祈りすること、二、銃後の堅忍、三、物資の奉公」
（昭十五・六）

「万法統一の正法を立てて、一君万民の国体を安んずる・・・四海帰妙の立法を立てて、八紘一字の国威を発揚する・・・不惜身命の正義を立てて、生成発展の国力を増進する・・・皇道翼賛の臣道実戦に邁進すべきである」
（昭十六・七）

日蓮遺文に於けるキーワードともいうべき「不借身命」は戦時生活を命を賭しておくことに集約され、「異体同心」とは翼賛戦時体制への協力と考えられていった。

戦時中に出された宗報を読みると、戦時体制に奉仕するため日蓮教学は組み直され、法華経と日蓮聖人の教えは全く元の形を止めないまでに歪曲化されていたのである。

戦後になっても、十五年戦争の推進と正当化に教団を挙げて突っ走った責任は全く検証されることなく、一億総懺悔の波に洗われ、禊を済ませた既成仏教は、昨今の仏教ブームの中、したり顔で仏法を説いている。

こうした男性僧侶たちの法話を聴く時、いかに仏法が歪められ、解釈されているかに驚いてしまう。いや、それ以上に、一般の人に対し、間違ったものを仏の教えとして信じ込ませるやり方には怒りさえ感じる。

例えば、八中道とは、右にも左にも偏らない考え方です（たぶん、政治的にいいらしい）Vとかハ「自然法爾」といいますから今、現在のあなたの方があるがままの状態が一番良いんですよVとかハ憲法を読んだら絶対男女平等といわんようになる・・・平等にならない・・・男女は完全に異質ですからV等々・・・。

現代では、非政治的立場に立つこと（を装うこと）により、僧侶は最も政治的な役割を自らが果たしていることを知らなければならない。

◇ ◇ ◇

『浄土真宗の戦争責任』（菱木政晴・岩波ブックレット）で指摘されたように、「平和を旨としていた宗教教団が外圧に耐え切れず、戦争賛美をしてしまったというのではなく」、「平等を旨とする宗教が俗世間の差別に感染したというので」もなく「むしろ、自信をもって、差別や侵略を美化し、聖化する教義をもっていた」のが戦時下各教団の実像だとするなら、軍国主義とファッショ化に抵抗する運動は宗教界に存在し

得なかったのだろうかという疑問がわく。

その答えとして提出されたのが、稲垣真美により発掘された次の二つの運動である。

その一つは、明石順三を主宰者としたキリスト者集団「燈台社」の兵役拒否を含む戦時下抵抗であり、他の一つが、妹尾義郎を指導者とする超宗派の宗教、社会変革の画期的な運動体「新興仏教青年同盟」である。（『兵役を拒否した日本人―燈台社の戦時下抵抗―』『仏陀を背負って街頭へ―妹尾義郎と新興仏教青年同盟―』いずれも岩波新書）

国全体が戦争遂行に向け一丸となっていた昭和の歩みの中で、それに抗して社会的実践をくり広げていった妹尾義郎という一人の良心的宗教者がいたことは、私にとって大変意味深い発見であった。何故なら、「日蓮を深く愛慕しながら、それをあえて捨てて、新興仏教で諸宗派を超えた仏教の統一を唱え」た彼こそ、真の日蓮の教えの継承者と思えるからである。

田中智学、本多日生、北一輝、井上日召、石原莞爾といった「日蓮主義」（国家神道と歪んだ日蓮教学を結合し、皇民化運動のラディカルなイデオロギーをつくり出した）といわれる国家主義者達の系譜がある。彼らとは全く対照的な場所に、妹尾義郎の実践と思想はあった。それが故に、二・二六事件勃発の年（一九

三六年）一方的弾圧により検挙されてしまう。その二年後新興仏青関係者約二百余名に対する検挙（治安維持法適用による）が行われ、彼ら「良心的仏教者」の活動は中絶を余儀なくさせられてしまう。

妹尾は得度していたとはいえ、一生寺院に入らずただの民衆仏教者だった。「祖師が苦しむ民衆の立場に立ち、権力者に対し、正法に立った国づくりを訴え（立正安国論）迫害されたのに、現代の寺院仏教者は大衆に《こころ》や精神主義やあきらめ主義を押しつけ、一方で莫大な喜捨を受けているのでは説教どろぼうといわれてもしかたない」といったようなことを彼は言っている。

新興仏青による社会的実践は、冠婚葬祭の虚礼廃止をはじめとして、水平社運動、協同組合運動、反戦運動、労働者・人民戦線との連帯に至るまで拡がりと深まりを持っていた。妹尾の呼びかけに応じ運動に身を投じる人も全国的にかなりの数に上っている。そのことから、私たちはファシズムに掣め捕られることなく、考え行動していた民衆の存在を知ることができるのである。戦争へと雪崩込んでいく閉塞状況の中にあつて、多くの良心的反戦意識をもつ人々をひきつけるだけの魅力が新興仏青の運動にはあったということかもしれない。

彼がスローガンに掲げた《仏陀を背負いて街頭へ、農漁村へ》については次のようなエピソードが残っている。若き日、病がちであった彼が「千力寺」とよばれる回国巡礼に立つ際、母は、「仏様を背に負いて、お前の信心を杖についてお行き」と話しかけたという。義郎の母に象徴される草の根の信仰者たちが、戦時中、どんな思いで僧侶たちの言動を受け止めていたのか気になるところである。

◇ ◇ ◇

宗教と戦争責任を考えるため、二つの違った方向で生きた戦争中の宗教者の姿をみてきた。

体制に順応し、その奉仕者となっていた宗門の教と妹尾のそれとを比較すると、彼らのとった対照的な生き方が納得できるのである。

宗門が改竄していった日蓮教学はもう元の姿を全く止めないものとなり、日蓮の魂はそこには残っていない。恐らく日蓮遺文に忠実であろうとする良心的僧侶が一人でも宗門にいたとするなら、苦悩するであろう宗門活動がくり拡げられていたわけである。しかし、あまりそんな話は耳にしないので、戦時中の僧侶は日蓮の教えとは無縁の人々であつたらしいと思わざるを得ない。

翻って、妹尾の場合をみると、仏教者としての確信

を支えていたのが真の意味での日蓮教学であった。単なる思想や、こころの問題に止まることなく、国家の姿勢に対しても、批判的に対峙できるものを生み出せるだけの信仰をもつことが日蓮の教えである。彼はそれを素直に読み取り、新興仏教の運動の中で実践していったのである。

現在の仏教界をみても、内実は戦前とそれほど大差ないような気がする。寺院に安住し、信仰者としての歩みと程遠い生活をする限り衆生の闇は観えてこないのではないか。

その意味で、私は、今、自分の置かれた状況——市井の一女性——の中でこそ、信仰を鍛え、純化させていくことが大切だと考えている。そのためには、男性僧侶や教学者たちが、「教学」の中に閉じこめてきた日蓮のみずみずしく深い思想を解き放っていくことが私のテーマである。

戦争暴力を廃絶する責任

田中良子

私の場合、信じている宗教はキリスト教です。従ってイエス・キリストによって揭示された創造主なる神と、その神の被造物すべてへの愛を信じています。そしてこの神に最も忠実に神の愛を証するために、人となってこの世を極みまで愛しぬかれて生きたイエス・キリストの、その生き方と教えに、自分も可能な限り真実を盡して従って生きて行く、それがキリスト者としての人生であると思っています。

私にこのキリスト者として生きることを決断させたのは、九才の時、敗戦で終結した戦争体験です。戦争は二度と起こしてはならない、と私はあの一九四五年の八月十五日に、心の奥底から叫びました。その心の叫び声を私は自分の全身で深く聴き、新しい敗戦後の日々を生き始めたのです。ですからどんな理屈がつけられようとも、私は人間が人間を殺し、体にも心にも癒し難い傷を負わせる戦争暴力には反対します。そしてこの生き方をそのまま受容れ得る宗教、それが私にとってイエス・キリストを信じる信仰なのです。キ

リスト教徒と言いながら戦争に反対しない信仰の証は私には考えられません。心情的、理論的又言葉の上での反戦主義も私にはイエス・キリストに従って生きていることとは思えません。イエス・キリストはそんな風にはこの世を生きられませんでした。しかし私はキリスト教とかキリスト教徒とかをそうした視点から審くつもりはありません。むしろ全き審き主の御前に自分の足りなさの赦しを乞い願いながら、神の愛の力に支えられ、励まされてキリストの平和の道をただひたすらに歩み続けているのです。審くのは義にして愛である神ご自身のなされることですから。

さて、神の御旨から外れた言動、それが罪です。その人間の罪の故にこの地上に行われ続けている戦争暴力という罪悪を私は直視します。目をそむけてはいけないと思います。恐ろしくて残忍きわまりない惨状を、それがどこで起こっていることでも決して見落とすことがないよう目も耳も心も体もしっかりと向けて、そこで苦悩している人々と共に生きる者でありたいと、いつも思っています。

世界戦争でなく、局地戦争の繰り返されている今、人間の苦悩が国家という壁で仕切られているかのような身勝手な理屈で、人間は自分を誤摩化かして生きています。内政干渉となるからという表現で、人間の苦

悩を救う手立てが無くなってしまったように振る舞ってすませてしまっています。それでいてときには経済封鎖などと言って、老人、子ども、病人などの弱い者を死の苦しみ追い込んでいます。戦争暴力には国境などありません。それは直接人間に加えられる暴力です。一切の理屈ぬきに人道的に誰もが戦争をやめ、廃絶するようにかわるべきだと思います。生命にかかわることなのに、政治の次元で介入をしないと、おとなしく黙ってすませてしまっていること自体、よく考えてみるとおかしいことです。どこの国の人間でも、声をあげてやめるよう熱心に働きかけるべきでしょう。戦争の原因となっているどんな対立、敵意、憎悪もその方法には選択の余地があるはずです。人間には神から自分を治めるちからが与えられているのです。このことを人間はもっと大事に考えて努力をし、戦争という手段ではなく、平和的手段で解決して行くべきなのです。欲も悪も憎しみも怒りも人間には誰にもあります。しかし同時に暴力を治め、暴力的ではなく物事を解決して行く知恵もちからも人間にはあるのです。そのように意志し、努力をする、ただ心内だけ思うのではなく、それを実行することが大切なのだと思います。

私はこの五十年間、正直に言って、いつも焦りを覚えて来ました。すれども、行えども間に合わない程、日本の国も世界も平和ならざる方向へどんどん行ってしまっています。平和運動はいつも後手にまわっていて、無力で果てしない虚しさを痛感させられて来ました。とにかく何一つ良くなっていないように思えるのです。むしろ核兵器の恐ろしさへの無知が人類をますます破壊へとどんどん追い込んで行ってしまっています。

しかもこうした事態の中で、私の周囲でもずいぶんたくさんの人々が平和運動に無関心になってしまいました。効果の無い運動を人々は軽んじ、見捨てて行くのです。人々はあきらめてしまったのでしょうか。手におえないことと見限ってしまったのでしょうか、平和に逆行してゆく重大事が次々に起こって来ている今の時にも、人々はもう多くは動きません。しかしイエス・キリストに従う生き方とは、まわりがどんな風に変わろうとも、やはりキリストの平和を、これが生命の道、これ以外に道は無いと歩み続けていくことなのだと私は思っています。効果がないから止めてしまうのではなく、人々が見捨てたからと言って自分も離れて行くのではなく、十字架と復活への道を進まれた主イエスを信じて、自分も又その道を進んで行くことだと思っています。

効果を焦る運動ではなく、自分は殺されても人を殺さない、非暴力の愛の道を歩む以外ないのだと、新たな五十年を前にして私は今一度この地に平和をつくり出して生きて行く決意を確認しています。絶望することのない信仰による力に支えられていることを感謝し、忍耐強く、生命ある限りこの平和の道を祈りつつ歩もうと思います。

平和を追い求める者はいかなる戦争暴力にも反対します。たとえどんなに小さなことでも、自分の日常生活の中で反対の意志を表明して行くことだと思います。自分が起こしたのではない、自分がやっているのではないと、そういう見方、考え方はしまいとしまいます。どこで、いつ起こった戦争暴力も、これは人間みんなで無くして行く責任を人間は神からゆだねられているのだと思います。知恵も権力も特になく私のような人間こそが、一切の戦争暴力にかかわる自分の責任を痛感して、日常の場で確かに反対行動をし、和解の務めを熱心に行って生きる時、この地上に平和がつくり出せるのではないかと思うのです。銃剣の力にも動じない、自分を殺そうとする相手も愛して決して殺さない、そういうイエスの示された非暴力の生き方をもっともっと真剣に鍛錬しなくてはと思います。そして国境という隔てを越えて恐怖と苦痛の中にいる人々を救い出

す人道的な活動を熱心に行って行かなくてはと思います。

敵意、憎悪、対立を解決するのに戦争暴力しか道はないとは、もう人間は思っていないと思います。ただ物質的豊かさを味わってしまった人々が、その自分達の生活レベルを維持するために、恐るべき利己心から戦争経済を必要悪として行っています。自分達は繁栄し、安全な生活の中に身を置いて、地球上はるかかなたでは人々が戦火に身を焼かれているのです。兵器産業は貪欲に暴利を得ています。この非人道的な構造悪を私達はしっかりと見据えなくてはと思います。そしてたとえその一本一本は細い糸でもその巨大な構造悪につながっている責任を痛感し、自分の生活を変える勇氣を持たなくてはと思います。世界経済を変えることなど出来はしないとあきらめてしまうのではなく、小さいけれど、しかし最も基本的な一人一人の人間が、自分を平和に生きるもの、平和をつくり出して行くものとして生きる勇氣を出すこと、隣人達に語りかけ、呼びかけ協力の輪を拡げて行くこと、このことを決してあきらめないでやり続けて行く、それが私には戦争を無くしてゆくやり方であり責任でもあると思っています。自分には力が無くても力の源であられる神に力を求めて、この五十年の失敗にめげることなく、新た

な五十年を快活にがんばって歩んで行こうと思っています。

国際的市民ネットワークの 発展を願って

岩 田 澄 江

日本キリスト教協議会（NCC）の中にある、キリスト教アジア資料センターという所で仕事をして早くも三年目を終わろうとしている。せまい意味のキリスト教にとらわれない（エキュメニカルな・超教派的な）仕事ができる所ときいたので、それでは、と働くことになったのだが、この点についての思いは、日々ますます深く、強くなっている。なぜなら日本も含めての「アジア」において、キリスト教の持つ意味はとても微妙であり、また国によってキリスト教との関わり方はそれぞれ異なるから、いわゆる「正統的」キリスト教では対処しきれない。

NCC内にこのセンターが設立されたのは一九八二

年のことであるが、その目的はアジアに無関心であった日本の教会や信徒に、アジアのことをもっと知ってもらい、また同時に言論の自由のある日本から、アジアに向かって発信することにあった。この間、韓国やフィリピンにおいて激しい民主化のための闘いがあった。

しかし十三年を経た今、これから正式な評価が行われることになっているが、日々の仕事を通して私の感じるところでは、いまだにアジアの問題に関心を持つ教会の数は少ない。そのためセンターは財政面で非常に苦しい。設立当初からアジアキリスト教協議会、世界教会協議会、欧米の諸教会からの経済援助を受けて運営を行ってきたので、世界の構造や経済状況が大きく変化した現在、向かうべき方向は自立しかありえないのに、国内的援助の乏しさのために困難に直面している。

「アジアのために」と言いながら、他国からの財政的援助を大きく受けてやってきた基盤の弱さが、ここに至って露呈した。日本の諸教会がその必要性を痛感して、その上で身銭を切って設立したのではないから、状況の変化にすぐには対応できない。また英文の刊行物も欧米の教会関係団体の派遣する宣教師に依存して出してきたので、そこに問題が生じれば出版自体がお

手上げになってしまふ。友好関係は維持していても、人を派遣できない事情は生じるし、ここでも自立の方向でいくしかない。日本が経済的に「大国」でないならばある程度の依存も許されるかもしれないが、現在のような状況において「日本は豊かであるが、教会は貧しいので」などと、いつまでも繰り返しているわけにはいかない。

アジア諸国の教会は植民地支配の先兵としてやってきたキリスト教に、強制的に入信させられてできた場合もあり、今もその歴史を引きずっている。そのためアジアという文脈においてキリスト教を語ることは、とても難しい様々な問題を含んでいる。アジアで今人権が最も抑圧されている東ティモールやビルマなどにおいて、このからみで難題に直面する。

日本の中では、今や「アジア」ということばを聞かぬ日はなく、テレビ、新聞、雑誌、書籍にもアジアの様々な情報は溢れている。グルメについても最もナウイのがアジア・エスニックであるらしい。またNGOの世界でもアジアとの連帯は着々と進んでいる。女性や農民といった個別のネットワークが、アジア各国と日本とを結んでいる。アジアをただひたすら日本経済の資源、工場、市場として利用するのではなく、平等な立場のネットワークがどんどん張りめぐらされてい

くことこそ、何よりも望ましいことである。

宗教会ではもともと仏教などは古来からのつながりがあると思うが、キリスト教の場合は前に述べたようにアジアと欧米とのこれまでの関係が、日本を含めて特殊であるために、自立の足腰がきわめてひ弱である。欧米中心史観から本当に抜け出て、主体性をもつためには、これからもかなりの困難が予想される。大日本帝国の風潮の中で、「日本のキリスト教」を主張して偏狭な誤りに陥っていった戦前の教会の轍を踏まないように、世界のどの国とも心穏やかに付き合うことができるように、成長しなければならぬ。優越感は劣等感の裏返しにすぎないことを肝に銘じて。

これから考えねばならない問題を簡単にしばってみると、次のようになる。

一、キリスト教を標榜しつつ、アジアにおいて存在する団体にはどういう意味があるのか。

二、キリスト教は本来アジアに生まれたと言えるが、長い西欧化を経たキリスト教を、どのように受容することがよいのか。

三、抑圧されてきたアジア人の中で、二重に抑圧されてきたアジア女性とは、果たしてキリスト教によって真に解放されるのか。(特に父なる神、ユダヤ人男性である唯一の救世主の下で。)

四、問題点があるにもかかわらず、キリスト教が現在世界的に形成しているネットワークは、よく利用されるならば貴重である。

最後の四、を取り上げるならばキリスト教は、植民地主義も大いにその形成に寄与したネットワークを用いて、これまで貢献をしてきたことは確かである。だが国境の壁を取り払った多様な市民的ネットワークが活躍しはじめた今、その本来的にパターナリスティック(保護者的)な役割を、徐々に終えつつあるのかもしれない。

その証拠として一例をあげるならば、戦後補償の最大の課題の一つである「従軍慰安婦」の問題をそもそも提起したのはキリスト教会ではなかったし、まず韓国において、また次いでそれを受けて日本やフィリピンで立ち上がったのも、個々の女性たちであった。「慰安婦」であった女性たちが声をあげることでできる種類の勇氣は、キリスト教会的な発想の中から出てこなかったし、また彼女たちを支えていくことにしても、フェミニズムの出現なくしてあり得ないことだったと私は考える。

これからの国際的市民ネットワークの基底をなす理念は、世界人権宣言的な、したがってキリスト教とも大いに共通するところのある普遍的理念であろうが、

あらゆる地域、あらゆる立場の人間に向かってもっと開かれた、非西欧中心的なものとなるであろうことは間違いない。

強制連行と戦後五十年

齊藤 七子

一九九五年は日清戦争勝利から一〇〇年、十五年戦争を戦い、敗れて五十年、一般では戦後五十年の節目とよばれている。この年を重要な年と考え、転換点として位置づけるのは次のような理由による。

明治政府は欧米列強と並ぶ大日本帝国を築くために隣国・朝鮮の制圧を意図し、その宗主国である清国を排除したいと考えていた。しかし「眠れる獅子」と恐れられていた清国と戦うには日本は力不足であった。当時、朝鮮各地に東学農民軍が蜂起し、朝鮮政府は鎮圧できず清国に援軍を求めた、その機に乗じて日本は居留民保護を名目に出兵した。ロシアとの対立を深めていた英国は、朝鮮を狙うロシアを牽制するために日

英同盟を結び、日本は英国の援助をとりつけ清国と戦った。主戦場は朝鮮であった。

最も恐れていた大国・清に勝った日本人は勝利に酔い、傲慢になり、中国人を、朝鮮人を蔑視し、チャンコロだ、ばかチョンだと侮蔑した。朝鮮の人々に対する差別はこの頃からだと思われる。

日本の勝利によって、植民地朝鮮は、日本帝国の一部になり、大陸侵略の兵站基地とされた。当時、朝鮮は圧倒的農村社会であり、人口の大多数は農民であった。封建的土地所有制のもとで農民は地主に隷属していたので、日本は土地私有制を認め、年貢を貨幣納付に（日本円に統一）きりかえた。それは社会発展にとって相応の対策であったが、租税全面改革によって、朝鮮の自然経済は解体し、モノカルチャーを促進させ、生産物は販売市場に出荷、集荷させたので日本の収奪を容易にした。農民から徴収した穀物は（九十％は米穀）朝鮮人仲買人をおして日本商人に売ったが、背後には日本の武装団、憲兵が帯同して強制的に安値でたいた。

また日本は地税（税収の六十％）、水利税その他によって収益を得、経済的、政治的、軍事的基盤を固めていった。他方、農民は強盗的な予約買い付けを強制されたうえ、地主は地税、水利税を小作料に転嫁した

ので小作農民は払えず、滞納者は差し押さえられて貧窮化していった。巧みに仕組まれた日本の植民地収奪は農民を債務奴隷状態に陥れ、流浪民、モスム、火田民に転落した者は農民の七十％に達したという。「農民は負債の淵に沈み、・・・生計の道を失い満州へ、日本へと流れていった」と日本農商務省技師も書いている。

一九〇八年には日本の軍部と内務官僚による国策会社、東洋拓殖会社を設立した。肥沃な稲作地帯を集中的に収奪し、所有耕作地二五万町歩、所属する小作農民十五万を支配する朝鮮最大の大地主（敗戦時）であった。

十五年戦争は朝鮮を「戦時統制経済体制」に組み入れ、以上みてきたような大多数の農民を中心に労働力として官斡旋、徴用など様々な方法で各分野に動員した。

一九三九年から始まった強制連行による朝鮮人は、朝鮮国内の強制徴発・・・四八〇、三一九万人、日本への強制連行一五二万、九四万人、軍族、軍人二〇、三〇万人、慰安婦一四万人（以上は推定数）といわれている。一九四三年には病人を除き青年は殆どいなかった、と朝鮮人動員部長は告白している。

朝鮮で、日本で、戦地で朝鮮人に対する支配、隷属

の重層的差別（性、民族、階層、職業等）が行われ日本人のなかに広く、深く浸透していった。

しかしあの敗戦の焦土から立ち上がったとき、私たちは戦争で犠牲になった二〇〇万人以上のアジアの人々に対する日本の罪を謝罪し、歴史から学び、アジアの人々と協力して新しい時代を共に生きるために何をしなければならぬか、一人一人が戦時下の行動を問わねばならなかった。日清戦争以後、日本人のなかに根強くある重層的差別を悔い改める機会としなければならなかった。アジアの人々のなかにある日本人への不信を信頼に変える努力をしなければならなかった。しかし私たちはただ一億総懺悔を唱えるだけで済ませ、米国王導の反共圏のなかに組み込まれていった。冷戦の到来は日本の為政者にとって好都合でもあった。米国の庇護のもとに日本の罪は隠され、裁判を免れたA級戦犯は釈放されて政権についた。植民地支配、侵略戦争に対する罪は不問に付され、責任を負うべき天皇はじめ指導者たちは責任をとらなかった。

今、そのつけがきて、アジアの人々だけでなく、世界の人々が日本の不当な行為に対して、日本政府を、日本企業を訴え、裁判をおこしている。ここでは私のかかわっている二つの裁判の具体的な事例を記してみ

たい。

ひとつは、二月三日、東京地裁で開かれた第八回公判「太平洋戦争韓国人犠牲者遺族会」、ふつう「江原道遺族訴訟」とよばれているもので、強制徴兵、徴用者に対する補償請求事件である。原告は韓国江原道在住の軍人、軍族三人、遺族十人、鉾山、工場等強制連行者十二人、その遺族九人の合計二十四人。日本国を被告として謝罪と補償を求めて一九九一年に裁判をおこし、九四年に「支える会」が発足した。原告の人々は戦時中日本の軍人、軍族、労働者として連行され被害を受けた韓国人なのだから、当然厚生年金法や労働災害法、援護法の受給資格がある、と考えていた。しかし①日本の法律はすべてに国籍条項をもうけて外国人を排除している。それは公平の原則に反している、差別扱いではないか。②は明治憲法であっても個人の「財産権」は保障されている。「財産権」のなかには財産より大事な命、身体の保障を含む。当然生命、身体 of 侵害を受けた場合には保障する義務が有る。③は強制連行された労働者は、企業の支配下にあり、支配下におかれた人の生命、身体 of 安全を企業は守る義務があり、企業には「保護義務」の違反があったのではないか。④としては強制連行（一九三九年以後）当時、日本は強制労働禁止条約を結んでいた、国際条約違

反ではないかと、この四点を請求根拠として今、日本国を相手に裁判をおこしている。

「江原道遺族訴訟」の会長である金景錫さんは一九四二年、十六才の時強制連行され、日本鋼管（NKK）では大型クレーンの操縦を受けもった。十二時間から十八時間／一日の過酷な労働条件の下で使役し、食事はお椀一杯の干しうどん、そのうえ労務管理の侮辱をうけ、四三年四月朝鮮労働者八三七人は帰国を要求してストに入った。ストのみせしめに十五人が検挙、監禁され、警官による脅迫、拷問をうけた。二人は殺されたか戻ってこなかった。金さんも殴打により肩を骨折、瀕死の重傷を負ったという。帰国はストの十カ月後だった。一生不具の身体にした保障を求め、また未払い賃金、強制愛国貯金の返済を求めて、一九九一年九月、たった一人で被告NKKを相手に提訴した。

二月六日「NKK訴訟」第十二回公判が開かれた。原告は戦後続いた韓国軍人独裁政権のもとでは、渡航の自由、訴訟の自由なく、金泳三政権になってはじめて訴訟が可能になったこと。未払い賃金、愛国貯金返済請求に対する被告の時効主張は不当であると訴えた。強制連行された労働者、軍人、軍族とその遺族にたいして日本政府は補償する姿勢を示さない。また多くの日本人も対岸の火事でも見るように眺めている。戦

前の罪を戦後も償わなかったことで追加犯罪を犯しているというのに。私たちは日本帝国主義によってつくられた壁を、支配と隷属の壁を戦後もひきずってきた。この機を逃してはさらに罪を重ねることになるだろう。

「支える会」について詳しいことを知りたい方は
〔齊藤さんか編集部にお問い合わせください。〕

宗教と戦争責任

渡 辺 秀 子

今年一九九五年は戦後五〇年である。

私は「戦争」というとまず広島、長崎の原爆投下を想い沖縄、東京空襲を想って来た。それは日本が被害を受けた側としての受け止め方であり、加害者でもあったということを意識していなかったということに最近になって知らされたのである。つまり被害者としてのこの十五年戦争を見ていたのである。加害者としては見ることがほとんど無かった。それは何故なのだろうか。

私が戦争を考える時、次の三点に注目してみたいと思う。

（一）天皇制

明治維新以降、日本の近代化の過程で「天皇制」が特別の意味をもってきたことを考えてみたい。当時の権力者は政治的権威を「天皇」に集約するために神道と結びつけることにより、天照大神の古くて神聖な権威を持つ存在としての神格化、日本の近代国家の指導者として絶対的な存在にしたと思うのである。神道と皇室を結びつけ、伊勢神宮と宮中三殿を最高位にして全国の神社が体型的に組織化されたという。この天皇制を中心にして支配体制はつくられていくことになる。その支配の形は「和」の精神である。「和」の思想は「個」を否定する共同体の論理である。メンバーの「個」は共同体の一部分にすぎず、それは全体の利益のためなら人間の「自己」あるいは「小なる我」の否定はむしろ歓迎されるべきことであった。あくまで個々の個は共同体の個であって、共同体のために存在するもので、没我帰一、滅私奉公を要求するものであった。それは戦時中の①命令ひとつで、②笑顔さえうかべて死に赴いたり、③死しか無い前途を祝福されたりして飛び立ったりした神風特攻隊に象徴されるし、現

在では企業における「過労死」にも相通じるものであらう。

この「和」の精神は一九三七年に文部省から国民の精神の教科書ともいふべき形で出された『国体の本義』が手本になったということをきいている。「和」の精神は「我等国民の唯一の生きる道であり、あらゆる力の源泉である」と天皇を軸に特殊な関係を築いたのではないかと思う。また支配、被支配の関係を国民にそれとはっきり示さない形で浸透させたのも「和」の精神ではなかったのだろうか。

「和」の精神は国民の一人ひとりとは共同体の一部品として全体の為に存在する。自分個人の小さな自己を否定することによって、大きな自己、つまり「天皇のため」「国のため」の繁栄を達成する道だと信じ込まされてきた。「大きな自己の実現」のため小我を否定することが国民には要求された。それが大和民族と称されて、大和の精神、つまり大きな和が重要視され日本人の基本的な精神となってきたように思う。この自己否定は人間を国家の一部品という考えに位置づけ日本軍における『軍務内務命』という天皇を頂点におく絶対的な権威を持つものとして強力に作用した。ここでは、最高指令官の命令は即天皇の命令であると思われる神聖不可侵のものであった。上官の命令によって

生じた結果の責任は全てそれを受けた部下の責任であり、命令に間違いなどあるはずは無いとされ、たとえ間違ったことがあっても、それは全て部下の責任であったという論理で日本軍は徹底的に教育されたという。こうした背景や土壌があったうえ、「和」の精神が、日本的な特徴となったと思うが、それをさらに補強したのが、仏教や儒教の影響があるのではないかと私は考えている。「他力本願」大いなるものに徹底的依頼心が強調されたり「空」や「無」の考え方など、また仏教の慈悲にすがり我を捨てて得られる「悟り」の境地、無常観、絶対者依存に基づく諦観などである。そして儒教などは、家制度と強力に結びつき、尊属、卑属、長幼の序、男女の別などを重んじたため支配、被支配、強者と弱者の関係を一層強めたのではないかと思う。

(二) 軍慰安婦

次に考えてみたいのは、軍慰安婦問題である。この軍慰安婦は二〇世紀の最大の女性差別迫害史であるといえる。そして私の憤りは長い間、この軍慰安婦の存在を知らずにいたということである。つまり、あの大战で、日本軍が自らの行為を人には言えず、できれば闇に葬りたいであろう、軍慰安婦の問題である。『国

体の本義』はアジア諸国の「大東亜共栄圏の建設」と

いう美名のもとに侵略、植民地化を正統化し「八紘一宇」の世界観を高揚し人々を鼓舞し、その精神を浸透させたのである。日本は優秀な大和民族で、大和民族に支配されるアジアは劣等な国だというアジア蔑視観は日本の近代化のための国策として、イデオロギー化された。それは欧米崇拜からきたものであるといわれている。遅れた野蛮なアジアを脱して、文化的、産業経済的な欧米のグループに入るという「脱亜入欧」を目示した。現在も何とはなしにはつきりしないまま、しっかりとアジア蔑視は根強く生きてるように思う。神国日本はアジアの盟主になることがアジアの幸せであるとした。アジアの豊かな土地は日本の補給地であり、男たちは奴隷労働を行い、女たちは日本兵に性的に奉仕する慰安婦であるとした。兵士たちは、天皇の赤子であり、天皇のためなら命を捧げて悔いなしと教育されていたから、反戦的、厭戦的気分が起きてくることを指導部は恐れていた。それを防ぎ進んで兵士を死地に赴かせるため軍慰安婦をあてがうことを考えたといわれている。女の性を利用して、男たちの性を管理することにより彼らを手中に収めることが狙いだっただろう。軍慰安婦は兵士たちの「戦意昂揚」のために、性病予防のために強制的に「共同トイレ」

として犠牲になったのである。

慰安婦に狩り出された日本人女性の多くは娼婦や芸妓出身者が多かったという。しかし軍慰安婦のそのほとんどが朝鮮人女性でありフィリピンやオランダの女性も多数引き立てられて行ったことが報告されている。

挺身隊という名の下に、朝鮮半島の各地から強制的に連れ出された少女から人妻にいたるまで、さまざまな慰安婦狩りが行われたという。二〇万人の軍慰安婦の八〇％は朝鮮の女性であったという。二〇万人の軍慰安婦の一人ひとりの人生を想い浮かべると、どんな想いで連行されたことか、そして家族や知人の悲しさも、どれ程のものだったか汲み取れたらと思うが想像すらつかない。騙したり脅かしたりして連れ出した日本軍は売春業者と朝鮮総督府の協力を得て組織的に女性・・中にはまだ子どももいたというが集められて、トラックや船で戦地で軍馬以下の物扱いされ、強姦を受け続けた。戦中使用された「突撃一番」というコンドームが最近堺市で岡本理研から売り出されたと聞く。すぐに市内の女性団体からクレームが出されたが全く日本企業のこの人権感覚の欠落に言葉もなくなる。この様に軍慰安婦たちの実態を、彼女たちの重い口から少しずつ明らかにされた時、この日本軍の蛮行の裏にある「日本的なるもの」つまり自分の良心にさえ従え

ない個の抹殺がより戦争下であぶり出されたように思う。

朝鮮は儒教精神が厚く、慰安婦として生きた過去を明かすことは親族のためにも許されなかったが、特殊な経験がもう二度と起こらないよう、またこれを風化させないよう、やっと重い口を開くことになったのは、戦後五十年という年月が決意させたのであろうか。

(三) 戦争協力者としての女性

日本女性のすばらしさを献身的な愛を注ぐ存在として称揚されたのも戦争と無縁ではない。そこでは女性たちは①日本の心臓は鼓動する／日本の母性も鼓動する／大東亜戦争／銃後の婦人として（中略）母性の尊重は／国家的な育成の義務から――来るべき時代への／真の希望。②わが日本の母は子どものためには喜んで自己を犠牲にする「無我愛の太陽」である。これは個人主義的な欧米の母親には絶対に見られないわが国だけの美風である。③母の子への愛情は、またひとりの子にとどまっているものではなく子を通じて発展するものであり、太陽のように降り注ぐ。この母の心こそが、世界に比類なきわが家族国家の結合原理、道德の根本なのである。④婦人の天稟の特質が母性にあり、母であること、又母になることが婦人の生命である。

（①―④昭和女子大学『女性文化研究所紀要』第六号内藤和重氏提供）と啓蒙され銃後の日本を守らされたのである。さらに「欲しがりません、勝つまでは」の言葉で象徴されるように「大日本国防婦人」「愛国婦人会」等天皇のために、国のためにと自らの息子や夫を戦場に送り出すことに大いに協力したといえる。

確かに、この戦争では人類最初の核爆弾が広島・長崎に投下された。その被爆の恐ろしさ悲惨さは決して忘れてはならないことではあるし、東京空襲や沖縄戦、そして万蒙開拓等多くの被害を受けたのも平和の尊さを知る上でも、あの大戦の被害は語り継がれてきたことも確かであるが日本の侵略行為をどのように受け止め、どのように語り継げばいいのだろうか。ここであらためて戦後五十年という節目に考えてみたいことは、私たちは忘れてしまっても、傷を受けたアジア諸国の人々は決して忘れてはいないし、責任のとり方の曖昧さも指摘されているということである。それにどう答えていくかが課題であらう。

女と国家

―観念による呪縛―

A 『古事記』(十六)

河野 信子

老婆 前回で、『古事記』にみられる太陽崇拜と權威の前で砕け散ったギリシアの地動説の話をなさいました。地下水脈としては、地動説は消滅してはしまわなかったと思います。何度も秘密出版で、アルスタルコスの地動説が出た話もございます。

それにしても、『古事記』には月の女神、星の女神が見当たらないのはどうしたわけでしょう。(水の女神を月の女神の変形とみる説もある。)

若い女 歩きはじめたばかりの「律令国家」(六四六年大化改新の詔を出し、七〇一年大宝律令制定)は、班田収授の法によって、口分田を「国民」に分け与えたりしましたでしょう。まさかこの時代「重農主義」でもないでしょうが、「国土」を整理し統合しようとする前のめり型の意志が「太陽の恵み」を至高のものとした面もございましょう。

大宝律令のもとになったのが随・唐の「律令制度」

を手本として、真似たところがあるといえますし。余談でございますが、男には二反・女にはその三分の二を分けるなどと宣言していますので、中心部分に集中させるには、月や星では具合が悪かったのではないかと思います。

老婆 随唐の律令制度を手本にしたのなら、北極星中心思想があってもいいのではないのでしょうか。吉野裕子氏がこの点について、興味深い指摘をなさっております。

「北極星の神靈化が(太一) (天皇大帝)であるが、推古朝の頃、天皇を名乗った大和の首長は、祖靈の天照大神も自身と同じ宇宙規模のレベルまで高めなければバランスを欠く、という認識から天照大神に太一を習合した。即ち、内宮(皇大神宮)の正北、アラマツリノ宮にひそかに太一を祀ったのである。」(『隠された神々』人文書院 一九九二年)

私は、この「ひそかに」のほうが気になります。「大和の首長」は、いまだ古代国家の「天皇」などということは許されない不安定な状態の中にあったが、随・唐に対しては、「日本」だと言い切っていましたでしょう。

若い女 『古事記』には、ことある毎に、八百万の神がでてまいります。天の石屋戸の祭儀空間を創出した

のも、スサノヲの追放を決定したのも、八百万の神です。となると「皇祖神」のほうの決定権は八百万の神アマテラスとなっていて、**「天皇」**には強引さがございますようで・・・。

老婆 六・七・八世紀の政権は、まことに、複雑な構造を持っています、一筋縄で把握しようとすれば、たちまち、ずり落ちてしまいますよう、**「天皇」**といえども、自らあがめる神を「ひそかに」としなればならなかったのですか。

若い女 「天皇」が隠れ「太一教」（タオイズムの流れ）をやったのか。それとも、その後、しだいに王権の中心部分に座をしめる仏教思想が、神仏習合の過程で、北極星分離を計ったのか、いまのところわかりません。

老婆 これが「日本神話」の複雑性でしょうか。中心がないということは、そう悪いことではございません。円錐型の政治体制など、ロクなことになったためしがございますまい。

若い女 東へ向いたり、西へ向いたり、山の上から天を仰いだり、大海原を望みみたり、この国の神意識も多様でございました。ひょっとしたら「まれびと」（訪れ人）たちの賑わいの国だったようにも思えます。

禅仏教グループとの 出合いと別れ

鹿毛 よし子

一、或る禅僧との出合い

「運が悪ければ悪い程立命した時の喜びが大きいのです。悪ければ悪い程いい。」「陰である事はいいい。神にそれだけ近づける要素を持っているという事なのです。」初めてこの禅僧に会った日のこの言葉には、半身付随で寝たきりになった父を抱え、不動産屋に騙されて父の財産を失わせてしまった当時のどん底の私の心を、「オヤ、ナンダロウ？」と転じさせる響きがありました。そしてなにより僧の眼から光が慈悲深く流れ出しているのを体中で感じとって、わけもわからず喜びに満たされてしまったのでした。

この僧侶は妻帯し二女兒の父でもあり、葬式仏教に堕している既成の寺のあり方に反対してどこの宗派にも属さず、檀家も持たず、T市の小漁村に拓かれた保養観光地内の寺を任されていました。曹洞・臨済両方の僧堂で修行を積んだこの僧は、T市・東京・Y市で太極拳を教え、坐禅会を開いており、私は会に加わり

ました。が、この僧の話を切実に聴きたくなったのは父の容態が悪化、入院して死への転帰をとり始めた時でした。同時に末期癌で入院していた親しい友人の看とりにも関わっていた時でした。

二、禅僧の教えと受戒

「至道無難、唯嫌揀拓」。「一つの絶対完全円満な実在、神とも仏とも太極とも名づけられている絶対という在り方を、好き嫌いの念で二つものと分けてしまう自分の感情・物差を徹底的に否定せよ。衆生本来仏也とは、自分の正体はこの絶対・神仏と同じであるとの教え。陰陽のバランスが崩れた時に必ず陰陽和合太極の円満にひき戻そうとする力が働く。その矛盾統一の働きの永遠であり、命であり、慈悲・観音力である。」「未だ絶対世界が明らかでなくとも、統一はこの坐に現成している事を信じて、心を励まして数息観を行ずる。この一行三昧になる事で問題は自然消滅し自他共に転じられる。」この教えを坐禅と太極拳の中で行っていくのがこの禅僧を中心とする会の活動でした。

この教えの下に私は坐り始めました。義母との葛藤を解決せねばもう生きていけませんでした。父の死と、父の遺言書をめぐって「自味得度先度他」をめざし、

内なる三毒を解決しようともがき続けました。「自分の苦しみなどどーでもいい。」「無功徳浄清心」との僧の導きは、父の遺言実行の柱となってくれました。結果は四面楚歌。誹謗中傷に絶対的孤独を味わった時に、「受戒とはお葬式の事です」の僧の一言の下に弾けるように私は受戒してしまいました。女性受戒者第三号でした。

三、禅僧の母性礼賛

僧は頻繁に「女性は母性を發揮せよ。」「これから時代は女性が力を發揮せねばならない」と檄を飛ばしました。僧は女性で二番目に受戒したXを、「道交会のお母さん」と評価。私は「母性が欠けている。アメリカの合理主義に毒され過ぎている」と批判されました。女性は母性の面のみ強調されて役割が社会的に限定されている、と私が発言をすると、「私の言っている母性は母親業という狭いものではない。菩薩の働きの事を言っているのだ」と私の言を即座に否定。

「宇宙には唯一絶対的働きがある。これが矛盾統一の力。赤坊が困った時に飛んで行く母の感情が宇宙にびっしりなんです。絶対に統一せずにおけない宇宙の力は本能的な力、母性愛として働いているのです。」

「日本の兵士達はお母さーんと叫んで死んで行ったの

です」と母性観を述べ、「女性にはこの素晴らしい母性があるのですから、それに目ざめなさい」と説教。

しかし「修行のレベルがある段階以上になると女性は男性に劣る」と女性を前に繰り返しました。この僧の教えの結果、会の中で母親のように会員の世話を焼く姿が強まるのを見て私は内心不愉快でした。

十年近くも会の中心になって共に世話人役をしてきたXY両人が対立衝突する事件が起きたのは、突然この合宿中、僧は自分の法友の奥さんを女性の鑑として話題にし絶賛したのです。会の女性は皆この女性に

会うとよいと僧は発言。実は女性受戒第一号のYだけが、合宿後にA山道場を訪れる法友僧の事を前もって知らされ、接待を仰せつかったのです。Yは長年の年上の友人のXにこの情報を一切知らせず、合宿後道場に残って法友僧を接待、さらに法友僧の寺に同行してその「女性の鑑」たる夫人にひき会わされたのでした。

Xは自分が全く蚊帳の外に置かれ、平等に扱ってもらえなかったと憤慨。「もう師を師と思えない」と僧への不信と、積年のYへのひっかかった思いを私にぶつけました。

道場での作務はすべて坐禅の呼吸で行う一行三昧の

行である訳ですが、全く新たなA山道場内でその場になり切って僧の理想とする阿吽の呼吸でサッと動く事は、僧の身近にいて勝手を心得た人間でなければ不可能でした。Yは僧の視線ひとつで何が必要かいち早く察知して一行三昧。「今回の合宿ではYが一番よかった。O市の接心（この僧の師匠の接心）に行くとき」とYは皆の前で賞めあげられたのでした。

やがて僧は、合宿後のXY両人の対立確執に手を焼いたのか「受戒した女三人（皆独身）仲良くしなければ破門だ。」と不愉快な顔で告げ、A山道場への出入り禁止を三人は申し渡されました。私は悩んで二ヵ月間は僧と口をきけず、『信心銘』の句をくり返し、懺悔文を唱え続け遍路行でできた「すべてを有り難く頂く」事がなぜ東京での生活ではできないのかと自分を責めながら、XY個別に話を重ね、更に三人で会って話す場を作り続けました。しかし自己防衛の鉄扉を堅く閉じきったYにはお手上げ。Yとは女性として手を組んで行くのは不可能と暗い気持ちでした。二ヵ月ぶりに僧に心境を報告すると、「それでよい。それぞれが自己の内に向けばよいのです」で一件落着。がこの二ヵ月間に、Yは僧と相変わらず何度も会って話していた事が後でわかり、僧の言葉を真に受けて悩んだ自分がバカらしく徒労感に襲われました。

この事件の中で、私は会員達が僧に賞められたくて一生懸命になり競争するようになる事実気づかざるを得ませんでした。「違順相争う、是を心病と為す」そのものでした。グループ内での絶対的優位者、権威者である僧に、ただ「ハイ」の一言で従い、お賞めの言葉を頂くと自分の存在が価値づけられる。グループ呆けるな、自立せよ、と強く説く僧を長としながら、現実には僧への依存関係、会員同士の競い合いが生じてくる事実気づいて愕然としました。

僧の母性礼賛は天皇礼賛につながりました。「家庭の中で父親が中心になっていないと混沌が生じる。男性と女性のはっきり差別すべき。虚実の混沌は醜である。」と発言。「天皇陛下は日本のお父さんです。」

「無限の世界を体でわかるのは日本人には難しくない。救済されるわずかな人は我々日本人です。飛行機で突っ込んで行けるんですから。誰かがこう言うとなぜすぐ軍国主義復活と大騒ぎするのか。」「日本女性は大和撫子の精神を発揮せよ」等々の発言を聞くに至って、私は教えのとおり善悪を言わず黙するしかありませんでした。「戦時中の隣組の制度は素晴らしい」と僧が言えば、「アー残念！もし今がそういう戦時下だったら私はりきってやるのに！」とYが喜々として反応するのを聞いて私は寒気を覚えました。

四、ホスピス+アシラムの構想

NHKスペシャルで『チベット死者の書』が放映されると、僧は看とりの活動を話題にしT市の寺でホスピス+アシラムを始める考えを再び話し始めました。延命でない看護である看とりに関わる中で真の自己に目醒める行を行う。このような看とりの実践の場を皆様にお与えしたいと発言。私はすでに父と友人の死に関わる中で看とりの活動をしたいと考え始めていました。

この数カ月後、T市の寺を所有している観光事業が億単位の負債を抱えて倒産・閉鎖。僧は閉鎖二ヶ月前に家族をK市に転居させていました。「敷地内の建物を自由に使って良いと私は社長に任された。男性受戒者を含め十人程集結する」と僧は発言。私は僧の現実感覚の無さに驚き、「ただイザ鎌倉という時にサーと結集し、寺に私がいなくても自立してやれ」と言われども動けないと僧に伝える。

一方、私は独自にエイズ支援グループに関わり始めこれを僧に報告。すると「日本ではエイズ患者差別が強くアメリカに比べて後進国と思っているでしょう。しかしエイズ患者は健康人と明確に区別すべき。陰陽の差を明確にしないから混沌となる。絶対差別の下の

絶対平等なのだ。エイズ患者はまとめて島に集め早く死んでもらう方がよい」と発言。後日この発言は①死は敗北でない、②死に行く人間に懺悔と感謝のないホスピスはダメ。同性愛の結果自業自得でエイズになった人達には懺悔心が無さすぎる。この二点を言う為に言ったのだと説明がありました。更に、「他の救済は自分が救われていなければ不可能。非力の観音・水に溺れる」と私の実践への一步を否定。自己の救済、つまり「自他の統一」を看とり活動の中で行おうと提起したのは僧侶自身ではなかったのか？

僧が日頃説いている「矛盾の統一」を現実社会で現実問題に直面した時に実践されるのか手本を見せてほしいという気持ちでT市の寺での成り行きを見守っていたのですが、寺へ結集する云々は「男の夢・ロマンの表現。女性にはわからない」と言われて哑然となる。

坐禅の中では僧の言葉は警策として働いた。しかし社会的行動をするレベルになった時、僧の矛盾にみちた「導き方」に私はノイローゼ状態になってしまいました。自己の思いを出さず、回りの流れをみて乗る。流れを誰が作っているか、どこへ向かうかは考えず、与えられた状況を受け身に引き受け、和して結果を求めず一行三昧を行ずる事はもう不可能でした。「仏教

は受け身にならないとわからない。我が強い。素直になれ。」と、とどめをさされ僧の理不尽と思われる「導き」も全部私の私の殻を破り真実に目覚めさせる為に振り降ろされる警策として感謝で受けるべきなのか？と懊悩。「受戒したからには容赦しない」との僧の伝言を受けた時にはもう限界でした。敗北感と罪悪感から心理的に僧から訣別するのに多大なエネルギーが要りました。受戒して二年半でした。

曹洞宗寺院の内側から

川橋 範子

アメリカの大学院でジェンダー研究をしていたころ、気の合う日本人女性が集まるとため息まじりに誰とはなしに言ったものだ。「アメリカ人（白人の）女性で日本研究をしている人って私たち日本の女のこと、全然分かってないよね」と。多くの欧米のフェミニストは、日本女性のことを「伝統に縛られ自らの権利に目覚めていない」、啓蒙せねばならぬ集団であり、それ

はある時は芸者やホステス、ある時はポルノコミックスの中で身体を切り刻まれている女のように捉えている。私と私の友達はこのような「文化帝国主義的」とも思える「悪意に満ちた」日本人女性像を克服することとを共通の課題にしていたように思える。そして時には「日本のOLだって主体性をもっている」とか「専業主婦にもある種のパワーと地位がある」などと日本の一般女性を弁護することに熱意をもやしていたようにも思う。

私は曹洞宗寺院で生活する、寺庭婦人（僧侶の妻）である。好運にも夫はリベラルな禅僧なので私自身はそれほど抑圧を感じているわけではない。しかし三年間曹洞宗の中に身を置くうちにいろいろなことが見えてきた。前にこの会報で一人の方が禅僧の連れ合いという立場がどうにも理解不能で不思議なものに思えるを書いておられた。なぜ現代に生きる女がそんな立場に我慢できるのだろうかという疑問を抱いていらっしやった。最近私も身の回りの寺庭婦人を見ていると「この人たちは伝統に縛られていて自分の権利を知らず、男僧に仕えることによってのみわが身を守ること」に精一杯」なのではないかと疑問を抱くことが多い。そういえば以前に熱烈なフェミニストである私の友人が「今時お坊さんなんかと結婚する女の気が知れない」

と言っていたのを思い出す。日本の保守的女性層の最後の砦が仏教寺院なのかもしれない。

私はたまたま宗教学の学位を持つ研究者でもあるが、結婚前に先輩の女性研究者からある忠告を受けた。

「僧侶と結婚するのはあなたの勝手だけど、もう一生女性研究者たちからは一人前と認められない。なぜなら僧侶の妻というのは軽蔑される存在なのだから。」

実際私もある女性研究者たちの集まりで僧侶と結婚しているというだけで、反フェミニスト的な思想の持ち主であるかのように彼女たちから攻撃された経験をもっている。勿論私は彼女たち、フェミニストを自称する研究者が欧米の一部の女性研究者が日本女性をステレオタイプに押し込めているのと同じやり方で、僧侶の妻を保守的、反フェミニズムであると考えてるのが妥当とは思えない。しかし私自身、身の回りの寺庭婦人と連帯することに非常な困難を感じているのも事実である。

現在、曹洞宗では世襲制が徹底しており、殆どの男僧は寺院に生まれている。それに対してその妻となる者は在家出身者が多い。つまり寺庭婦人のノビス（初心者）にとって、寺の生活やしきたりは全く未知のものである。一人の聡明そうな、私より一〇歳も若い寺庭婦人が私に打ち明けた。「私のお寺では方丈さま

（住職）の身の回りのお世話は一切私がするように姑にいわれているのですが、分らないことが多くてたいへんなのです。私に子どもができないのもそのためでしょうか。」私はこう聞いて腰を抜かさなばかりに驚いたが、気を取り直して、彼女の隣に座っていた彼女の夫に言った。「お坊さんって本来自立していてもご自分でなさるのが本当でしょう。ご自分ですることはなさったらいかがですか。」断っておくが、私はその可憐な女性を批判するつもりは毛頭ない。ただ、心の底から同情する。彼女にとって僧侶とは尊敬すべき対象であり、その対象にお仕えするのは女性としての定められた役割である、と半ば納得し、半ばあきらめているのであろう。

別の寺庭婦人は裕福な寺院におさまり、檀家の人々の上に君臨している。彼女は私に誇らしげに言う。「私は方丈さま（夫）の名代でいろいろな所に顔を出しているの。格の高いご寺院の住職婦人だから、地域の名士婦人の集まりにも呼ばれるのよ。本当に寺庭婦人って幸せよね。」彼女は男僧の集まる場では必ず甲斐甲斐しくお茶を入れ「よくできた女性」と言われることに喜びを感じている人である。曹洞宗内に抑圧された女性たちが存在していることなど彼女の視野には全く入っていない。「こんない暮らしをさせていた

だいているのに宗門内の女性差別問題なんてつまらない事を持ち出さないで」と言われたこともある。彼女は現在の自分の「幸福」がすべて夫である住職の一存に懸かっていることを知っているのだろうか。その幸福の維持のためには保身の術に徹して、模範的寺庭婦人を演じつづければいけない。

また別の寺庭婦人は明らかに人権を無視された立場に追いやられ、住職やその身内に酷使、つまり労働力の搾取をされている。しかし彼女はすべては自分にとっての仏道修行であると帰結してしまう。本当に修行すべきは彼女を虐げている人々である。

私自身は今年、曹洞宗宗務庁から依頼され、公の場で寺庭婦人が抱える問題について私なりの意見を述べる機会に恵まれた。来年度も曹洞宗報で、寺庭婦人初の編集委員として発言の場が与えられることになっている。しかし男僧たちの壁の厚さに圧倒されることもしばしばである。自我を無にすることが身上の僧侶たちの *male ego*（男性としてのエゴ）のなんと強固たることか。

例えば私が信頼していた青年僧は、宗門内で男女平等が実現されるべきだという私の発言に対して次のように述べた。「ある人たちにとっては平等が最大の関心ごとかもしれない。しかし自分にとっては悟りを得

「錯信帯」と文化の歪み

加古 美華

ること、身心脱落のほうが大切だ。」私は目を背けたくなった。いったい彼には分かっているのか。平等という機会を与えられていなければ身心脱落について考えるゆとりもない。

かくしてアメリカ時代に日本女性（そして男性）を弁護していた私は部分的転向を余儀なくされそうである。これだけ欧米のアカデミアで日本叩きが流行する今、日本仏教会は近いうちに間違はなく日本の家父長制の牙城としてターゲットになることであろう。今、曹洞宗のみならず日本の仏教界は重大な決断を迫られている。女性差別問題を克服して、次の世代に生き残るか、できないで完全に消滅してしまうかである。幸い私は最近、日蓮宗、本願寺派、大谷派など、仏教の中の女性差別と取り組んでいる他宗派の女性とのネットワークを少しずつ広げている。エネルギーが枯渇する前にこの輪を少しでも広げていきたいと願っている。

私達は今までに幾度も宗教上、あるいは文化上でのいろいろなフェミニズム解放論を論じてきたが、そのどれもが納得のいく素晴らしい展開を見せている。もちろんまだ多少なりとも考え直さねばならない問題もあるが、しかしどうもまだ理論の上での印象という感じがしないでもない。

だからいざ実践となると一体どの様にして男女間の役割だとか性差に対してつじつまを合わせていけばいいのか、まだまだその方法が掴めていない様に思える。

思うに、以前から性差役割分担や古典的文化の解体などを実践するとなると「一体どうやって？」と行き詰まってしまうことが多々あるように思う。そのうちにこの世に絶対的な思想などというものはあり得ないという事に行き当たった。

一つの思想上の理論には必ず賛成と反対があるからである。もちろんそれを試みる人に「私は間違っている」などと思いつながら行動する人はまずいないだろうとは思いますが、一方でこれは完璧で正しい見解だと思う

人があるとすれば、他方でいや間違っていると反対する人が現れても何ら不思議ではない。当たり前的事だが。

しかし、賛成や反対があるということこそが真実ではないか？その方法が（宗教や政治、その他何でも良い）ある方向で完璧であるが、ある方向では補わなければならぬ欠点というものが出た場合、その賛否が顕著に表われもしよう。ではどうしたらいいか？フェミニズムにおいて我々は自己実現に向けて行動できるか？大切なのは自分は何を選択するか、という事だろう。それには慣習や他人の意見、マスメディアなどに振り回されないで自分のために選択していくという事が大切だろう。ところがこれが簡単なようでいてけっこう難しいかもしれない。それは、気がつかないところで人は案外他人の目に振り回されて本来しなくともいい事、誤った選択の仕方をしているという事である。そこでしばし問題になるのは我々人間は他人の賛同を得ないと気がすまないという観念があるという事実であろう。なにしろ多くの社会では、他人に認められるのが成功への道となっている。

本当の自己実現を果たすうえで、他人の是認や賛同を得たいという欲求がそれを阻んでいるように思う。さて、他人の是認や賛同とは一体どのような場合に指

して表わしているのだろうか。

アメリカの心理学博士ウエイン・W・ダイアーが著書の中でこう述べている。他人の賛同を必要とする基盤になっているのは一つの立場である「自分自身を信頼してはいけない。まず誰かに調べてもらいなさい」人の是認を必要とするのは「あなたが私をどう見るかの方が私が私をどう思うかよりも大切だ」というのに等しいという事である。人間においては自己実現こそが解決の道だと思うのだが、自主的な思想というのはそうする習慣がないということだけでなく社会の砦となっている制度そのものの敵なのである、他人が望むことをしているほうが、実際のところ楽だし安全ということである。

それは幼い頃からの良心の躰に始まり、学校教育へと移行してゆき、ひいては社会の中で、男・女を問わずこうした属性が染みついているという訳である。ダイアーは自己実現のじゃまになるような感じ方、考え方、あるいは思い込みを「錯信帯Ⅱエロニアスゾーン」と言っているが、こと日本では文化の拘束の強いところであるのでこの「錯信帯」が複雑に入り交じっているであろうと思われる。もちろん日本のみならず、どの国でも既成宗教文化圏が作り上げた慣習や伝統的な道徳などにおいてこの錯信帯に金縛り状態になる

事が多いと言う。金縛りとはここでは自分の望むレベルで自分が（感情あるいは肉体的に）機能していない状態を言う。

ダイアーはここでは人間全体の事として著書に表わしてはいるがフェミニズムの視点から見れば、男・女の関係においても充分体系だてられはしまいか。私達の文化は他人の賛同を求める行為を生活、思想の基準としてますます強化していくという、私達を取り巻くメディアがどれ程こう言ったメッセージを発信しているか我々は気が付かないうちに汚染されている。例えばTVコマーシャルやヒットソング等は身近でもっとも分かりやすい例であるといえよう。割合と知らないうちに私達の脳の中にインプットされているのでこちらの方はもっと有害である。

再びダイアーの著書から引用すると

- ・あなたなしでは生きられない
- ・あなたがいれば幸せ
- ・すべては あなた次第よ
- ・あなたは 私を生まれ変わらせてくれる
- ・もしも あなたがいなくなったら
- ・あなたは 私の人生の光

毎日毎日 他人の是認を求めなさい、というメッセージや歌をたれ流し続けているのに気が付くだろう。

こういったポップソングやCMがあまりにも多いのでびっくりさせられるが、例えばエステのCMなどに見られる美の基準など一体誰が言い出したのか全くバカバカしいのであるが、まるで「痩せてプロポーション抜群にならなきゃ男にもてないし、いい男と結婚できないよ」などとまるで脅迫じみた内容ではないか、などと思う時があるのである。一体誰のために美しくあらねばならないのか、そこが問題である。それから歯みがき、防具スプレーなどのCMもそうである。

「人に認めてもらわなければ恥ずかしいのです。そのためにはこの商品を買いましょう」と言っているようである。「友達や恋人（又は他の人）に良く思われるためにはこのブランドにしよう」と言う訳である。広告主のほうは視聴者がダイアーの言う「他者依存病」に誰もがおかされているのを見抜いており、この心理を利用して的確なメッセージや場面を画面に提供しているのである、それはなぜか？そういったCMにすれば売れるからである。こうして我々の多くは他人に認めてもらいたいのために他人の賛同や是認を求めることを重要視し、奨励するような文化に適合するという。今度前出の様な他人の是認を求めてばかりいるような自主性のなさを示す歌を聞いたら試しにこんなことをしてみれば、とダイアーは言っている。誰かに認め

でもらえなかったり、誰かのせいで気がふさぐとどうしようもなくなる、というそんな心の状態を歌った歌をチェックする、そしてその歌を主體的な心の状態に合わせて書きかえてみるとうなるか？

・女として自然な気持ちでいるのは私自身そうしようと思ったからであなたとは関係のないことです

・私はあなたを愛そうと決めた

あの時はきつとそうしかったに違いなければ、今はもう気が変わったの

・他人を必要とするような人は世界一不幸な人

愛を欲し、人との交わりを楽しむような人は自分も幸福になる

・私がこんなに幸せなのは私自身にあなたのことを語って聞かせているから

・私こそ私の人生に射す日の光。私の人生にあなたがいればその光はもっと明るいし輝くでしょう

・あなたを愛することをやめることもできるけど今はやめないうもりです

「あなたがいなければ、私は無に等しい」という表現は「私自身がなければ私は無に等しいけれど、あなたがなければ今の時がとても素敵なものになる」と言い換えなければならない。

こんなふうに変えてしまったらもちろん売れないに

決まっているが、少なくとも気にもとめないで聞いている言葉、私達の文化にあってはよしと信ずるようになってしまった考え方を表わしている言葉をだんだん方向転換してやる事はできる、と彼は言っている。これは視点を変えた全く新しい男女の関係を言い表わしてはいないだろうか。

今まで女性性は男性の庇護のもと、従属するのが当たり前と観念されてきた事が、一変にして変わるであろう。又、ダイアーは教えられてきた習慣というものは、ゴミのように高いところからポイと簡単に捨てられるものではないが努力により一つ一つ階段を下りる様に下りて行けるという。それには毎日一つづつ服をぬぐ様に古い足かせをはずして行く事であろう。大切な事は自分の為に何を選び、何を考え、行動するかということなのであるが、どうもその選択の基準が狂っているという事であろう。別に美しくある事が罪であるとか、清潔にするのにそういうグッズを買うのが悪いという事を言っているのではない。肝心なのは、誰かに賛同してもらったためではなく何事も自分が気持ちいいと思ったからする、という気持ちの方が大事ではなかろうか。

結論を言えば皆の気に入るようにはできないし、生きられない、という事になるだろう。一〇〇人のうち

半数の五〇人がもし気に入ってくれたら上手くやっている方ではないだろうか？しかし、それが良いとか悪いとかの問題ではない。物事には一方向だけでなく全く別の方向からの見方というものが存在するのだし、それによって賛同が得られないからと言って、そのものの価値が全く無くなってしまふという事もないからである。自分は自分なのであって他者ではないからだ。子供の頃は自分のやりたいことを特に理由づけなどしなくともただ好きだからという理由だけでやっていたはずなのに、大人になるとそうは思わなくなる。何をするのにも何らかの理由づけが必要になってくるわけだ、自分に対して、他者に対しても、理由づけをしなくてもよいとわかったら、どんなに楽だろうかとも思う。やりたいからやるのだ、他に理由などない。

ダイアールの論はもちろん宗教ではないが意外にも、その思想の中には、ある種の宗教性とも言うべき意味合いが感じられるのである。ともすれば超個人的主義とも取られがちなこの見解が、反面わがまま、利己主義とも表現される「個」の確立こそ全体に通じる理念ではないだろうかと思わせるのである。ただ、私達女性がこの社会を生きぬく上で、非常にヒントになる知恵が隠されている様に思えてならない。

第十八号を読んで

(一) 姉妹よ

怒りを燃やそう

鶴岡 瑛

福島さん、本当に毎日大変ですね。第一八号の「現代版樞山節考」を読んで、私の悲しい姉妹がここにいると感じました。私も父や兄弟相手に同じような経験をし、母の介護で同じような思いをしているので、まったく他人事とは思えません。私の場合は父母が色々な問題を解決しないまま、要介護の状況に突入してしまつたので、問題が余計複雑になり、兄弟対姉妹の争いとなってしまいました。男と女の違いは親に対してさえも出るものかと思われました。姉や私は、人間としての親を中心に考えようとするのに対し、兄弟の方は便宜や都合の方に人間を合わせようとする傾向があったと思います。家父長制度などと大きく構えるまでもなく、父母と子供で形作る最小単位としての家族という形態でさえも、上ー下や強者ー弱者の関係を

生みだし、葛藤がなくてはすまないものでしょうか。書く方も、また読む方もしんどいかもしれませんが、わが家の事情をお話してみます。

父のことを私は子供の頃、化石のような情味のない人だ感じていました。妻や子にすさまじい暴力を振るい、学齢前の私はどうしたら父を殺せるだろうかと、真剣に考えたことがあります。坊っちゃん育ちで経済的にも無責任な人でした。ワリをくったのが母ですが、これがまた父に劣らぬガンコで融通の利かない自己中心の人。父母は不和の中で四人の子を生み育てました。四人の誰もが、自分など生まれなければよかったと思っただけです。その中で兄弟の一人（以後Zと呼ぶ）が受験の失敗を契機に家庭内暴力になったのも、そうした家庭の雰囲気なのでしょう。彼が一番弱かったからと思いますが、彼の行為は弱い者がさらに弱い者（母親や他の兄弟）に苦しみを転嫁するものでした。自分の愛情で彼を治した、彼の命を助けたと、自分の行為を美化している母は、絶対気づこうとしないことです。母が齢とって以来最も母に冷淡で、自分に親がいるのを忘れているかと思われるのがこのZです。私は若い頃離婚して親元に戻りました。高卒で特殊技能もなし、結局半端な勤めをしたあげく、親が齢とってからは家業のアパートの面倒を見ていました。姉

は早くに結婚して平穩な主婦として暮らしていますが、性格が強くて、父母とも合わず、弟達との間も反発が先立ってうまくいきません。兄、弟のどちらも親の老後を見る意志も、能力もないとなれば、姉や兄弟の応援を得た上で、私を中心になって父母の老後を見ていくしかありません。わたしのつもりでは、その時点での家族とは、父と母と私と思っていました。長い間の父の経済的な無責任のため、母や後には私が苦勞して家を守ってきたといえます。ですからいよいよ父母の老いが迫った時点で、古アパートを処分して、そのお金で老朽化した自宅を介護のいいように変えたり、介護の資金に宛てることを考えた時も、父母の同意があれば（それまで何の助力もしてくれなかっただけに）兄弟もそれほど反対はしないだろうと軽く考えていました。財産というほどのものではありませんが、父母を見送った時点で残ったものは、四人の子が平等に分ければよいと思っていたのです。

そこで私はこれまでの母の苦勞を思い、母の欲求不満をなだめる税法上の配偶者への優遇措置を利用して、自宅の土地の一部を母に贈与するよう強く父に働きかけました。ところがこれが兄弟の危機意識を煽ったようでした。元々彼らは、父母が亡くなるまでアパートにも自宅にも手をつけないでおき（つまり父母に不自

由な生活をさせて）、その後でお手盛りで分けようと考えていたようです。ですから私はなにをするかわからないと、何がなんでも自分達が主導権をとらなければと思ったのでしょうか。

兄弟の一人Xは、妻の実家の敷地内に住んでいたの
で、自分が父母を見ることは事実上、不可能だったわけであり、最初は（私を追い出して）Z夫婦が父母と一緒に住んで面倒を見るべきだと主張しました。当のZの妻もそんな気は全然なかったのです。ところがZもずるくて、それをはっきり言わないのです。電話を掛けてものりくらり逃げてばかり、相談したいとい
ってやって来ないという状態でした。そこでXは方針を変更して、自分が父母を見る、ついでには一緒に敷地内に住むから、そのための土地を買い家を立てる金を売買代金から出せと言ってきたのです。父母のどちらもXと住むのは嫌だとおぞけを振るっているのに、不動産屋へ行ってどんだん話を進めてしまいました。実際にアパートが売れてないの見込みで契約したら、大変なことになると父母も心配はしているのですが、どちらもXにやめろと強くいえずに、私になんとかしてくれというばかりでした。仕方がないので私が憎まれ役になって、断固その計画をつぶしました。

その後父、母、兄、弟が勝手なことばかりいうので、

アパートを整理した段階で私は家を出てしまいました。その後すったもんだがあつて、父は小田原の老人ホームに入り、母だけが元の家で一人住まいすることになりました。ところが最初は嬉々として一人暮らしを楽しんでいた母が、当てにしていたZ夫婦にかまっても
らえず心細くなり、多分私を呼び戻すためでしょうが、病気に逃げ込んで一時は寝たきりの状態にまでなっ
てしまいました。どうしようもなく私がまた浦和に呼び戻されました。

父は父でX夫婦とうまくいかず、怪我やら病気の度に、私に会いにきてくれとせがむのですが、寝込んで
いる母を置いては、そうそう行くことができません。私は父母のどちらにもつきたくないから家を出たわけ
で、そうなるとうちに父の毒で、せめて近くにしよう
と母を連れて小田原に引っ越しました。

そこで元の家を処分することになり、今度こそ大変な騒ぎになりました。父母は前回のアパートの件で、息子達の不手際にコリゴリしていたので、すべて私にまかせると委任状も書いていたのですが、Xは父の実印を押さえていて私に渡さず、受取に行った私を家へも入れず、《一步でもオレの敷地に入ったら警察を呼ぶぞ》とまで言う始末。その他にも様々に妨害し、私が依頼した弁護士に、《父母には責任能力がないから

委任状は無効だ」というので、弁護士がビビッてしまい、度々の経験で知っている私が《どうせ脅しだけだなにもやれないから大丈夫》と言っても、結局自分の保身のためと思いますが、念のため医者診断書を取れというのです。ところが医者さんも、うっかりそうした争いに巻き込まれたら大変、という心配がアリアリ、自分はそれほど長い期間見ているわけでないから、診断書は書けないとのこと。思いあまって以前からの掛かりつけの浦和の女医さんを訪ねたら快諾して、忙しい中をわざわざ小田原まで来てくださって、《一応書いたものでいいと思うけれど、もし裁判になったら私が出ますから》とまで言って下さいました。みじも自分の保身を考える気配はありませんでした。その方の口ぶりからも、親が自分の経済をきちんとせず、病氣や老耄に陥ってしまうと、こうした争いはありがちなことということが窺われました。

またある役所にある証明書を取りに行って、手続上の問題に引っ掛かるので、書類は出すわけにいかないと一旦断られました。また小田原へかえって父の判をもらって出直しかと、ガッカリした私を見かねて、その女性は周囲を見回しながらそっと別の書類を出し、《ほんとはいけないんだけど。その柱の影でこれに記入して出して下さい。このことは絶対ほかの人に言

わないで。》と囁きました。親切と同時に勇気の要る行為でした。その人のためにも人目をばかって、充分に感謝の気持ちを表せずに残りました。概して女性に富むというのは生まれつきでしょうか、環境のせいでしょうか。だんだん男並の味気ない女性が増えていくようですが。

すべてが片付いた頃例のバブルの崩壊で、結局私の見通しが正しかったことが証明され、母に土地を分割しておいたことも、税金面で大変有利に運びました。父はその後一年経たずになくなりましたが、おかげで（金銭面においては）出来る限りの介護もできました。相続でまた同じ争いを繰り返すのはいやなので、父には酷でしたが、私を執行人にして（家族の間でモデルことが予想される場合はこれが大切）公正証書の遺言を作ってもらいました。ただし分け方は法定どおり、法定どおりなら手間やお金をかけてこうした遺言を作る意味がないと公証人は渋りました。そうしたおかげで兄弟が口を出す余地がなくなりました。父の遺産はちゃんと取ったくせに、兄弟はなんと父の葬儀の費用を一円も負担しようとしませんでした。

今私は戦うことの大切さを実感しています。私はもの心ついて以来争いの中にいて、あなたのように、父

やZと取っ組みあいの喧嘩をしたこともあり、その後の空しさ、やりきれなさは、経験のない人にはとても分かってもらえないと思います。けれど避けてはならない時も確かにありますね。それはやはり愛情や優しさのためでありたいものですが。ただ肉親であっても男は女に負けるのが嫌だから、一旦始めたら徹底的にやる覚悟が必要みたいです。兄、弟も、私がどこまでやるか分からない女と悟って態度を変えました。どうしても憎む相手が必要と見えて、今では姉の方にホコ先を向けています。

そして、怒ることも大切なのではないのでしょうか。今の世の中は、当然怒るべきことに怒らない人が多いみたい。また怒ることをいけないとする風潮（ことに宗教の世界では）があるようです。本当に腹が立たない人ならともかく、怒りを自覚せず内攻させてしまうのはよくないことです。ただ本当に怒る、ということは難しいことですね。私が長年母やZの苦しみを見ていて感じたのは、あまりに感情的で自分本位で狭いところへ入ってしまうと、どこにも出口がなくなるということです。怒りもおなじことではないでしょうか。今私は《どうどうたる怒り》にあこがれています。わたしではちょっと貫禄不足？。また正義感と誤解されると困りますが。違いは多分、お互いのこの現実を

《悲しむ》心があるかどうかということでしょうか。でもわたしにとって母との関係に比べれば、父や兄弟などどれほどの問題でもなかったと感じるのです。母と私の問題を語りだせば、もっともっとどろどろしたつらすぎる過去に踏みこまなければなりません。間違いないえるのは、母のようなものすごく傷ついた人と母娘にならなければ、私の人生はまったく違っていたろうということです。私が今危惧するのは、男並の論理を持ち、競争社会で傷ついた（内心に挫折感を持つ）女性が母親になって、どういう子育てをするかということなんです。家制度の締め付けのゆるんだ時代に、母と娘はどのように生きるのでしょうか。これからのフェミニズムの課題と思います。

（二）アンケートへの感想

石川 信子

・・・アンケート結果を拝見し、自分と同じ思いを抱いていらっしゃる方が沢山居られることを知り、日

頃の孤独感からしばし解放される思いでした。少々感想を述べさせて頂きたくお便りしました。

先ず、神秘体験についてです。私もさまざまな形で現代の科学では説明できぬ体験をいくつか持っています。だから、全く否定は出来ません。しかし、釈尊や道元様のおっしゃるように、そんなことを追い求めても詮無きことと考えます。死後の世界があったにせよ、生まれる以前の世界があったにせよ、それも生、あるいは死の一時で、もっと先、もっと前の世界があるかわかりません。それより今存在している時代をもっと見極め、次の世代につなげて行くことが使命ではないかと思います。

鶴岡様の言われるようなことも、座禅の中で体験される方もあります。しかし、だからといって、それが必ずしもオールマイティではないように感じます。たとえば何か啓示を得、全宇宙との一体感を覚えた人でも、ある部分で非常に差別的であったり、抗議されても自分を正統化することしかない場合がよくあります。私は神秘体験は過小評価も過大評価もすべきではないという立場です。そういった体験によって、何か自分が特別の如く思い、奢りに走ることも少なくないからです。あらゆる人権問題で、ある分野では敏感な人が、他方では全く差別的なことも稀ではありません。

神秘体験がすべて補ってくれるかどうか、私は疑問に思います。また、曹洞宗の座禅について書かれていたもので、少し触れさせていただきたく存じます。

曹洞宗は座禅を重んじ、鶴岡様が言われるようなお坊さんやそうでない人もいます。人によって座禅への関心の度合いはさまざまで、中には一生座禅にかけている人もいます。もちろん、そういう方には、それなりの体験があるからだと思います。それは月に一度程度ではなく、毎日何時間もの座禅です。また、海外のカトリックの方々も、わざわざ日本に座禅を学びに見えたり、自分の国の修道院に禅堂を設け、スケジュールを決めて行われております。米国には休日をもとめてとり、一日一〇数時間座禅をし、それを数日続ける「接心」をする人もいます。そのかわら、福祉事業をしている人もいます。皆私の知人です。この事実を鶴岡様に知って頂きたく存じます。私ども曹洞宗の僧侶は、皆修行寺に何年か入ります。人によって期間はいろいろですが。むろん、座禅は毎日です。そしてその指導は「一年や二年ではなにも分らない」ということです。

道元様のことにしても少々誤解があるように思います。近年、仏教研究が急激に進歩する中で、従来の道元様の思想解釈について問題が投げかけられていま

す。「本覚思想批判」それ以前、以後のことは中野優信様がよくご存知のことと思います。今、曹洞宗内で信仰を左右するような仏教学者の論争が生じています。道元様の思想については、宗門の内外を問わず、多くの人が語っておられますが、本当に参究されるなら、もっと仏典を読んで頂きたい願います・・・道元様のものはつまみ読みでは誤解を生じやすく、すべてに目を通す必要があると思います・・・。

最後の方に肉食について触れられていますが、肉食だけを特別視するのはどうでしょうか。世界には肉食でしか生きられぬ土地柄の人もいます。また、国際化が進む中で、この国に住んでいる外国人のお葬式、法事などでの精進料理のあり方についても、近年見直しが迫られている現実がございます。安易な判断、信仰はそういった人びとに寄せられる差別観を助長しかねません。

現在私は被差別部落の人、外国人、ハンセン氏病の人、さまざまな被差別の苦しみにあっている方々と接する機会を好運にも持っています。それぞれさまざまな問題を抱えて暮らしておられますが、他の分野のこととなるとすぐに理解してもらえぬこともあります。

「共有」ということがこんなにも難しいものなのかと度々感じます。私自身も被差別者でありながら、差別

者なのかも分かりません。

アンケートの中で「五〇年後の人の世は云々」とありました。私は「分からない」としたと思います。

世界中でこれほど宗教や信条の名の下に争いが絶えず、また、武器も大きな破壊力を持つようになり、犠牲者の増大も必至な中、とても高次なものへの魂の変換が行われているとは考えられないからです。戦争経験者だからといって、必ずしも平和的であったり人権について関心があるとは言えないと思います。実際、私の祖父は二等兵で徴兵されましたが、戦争が終わり、帰ってくると、今度は生きるため、食べていくため、商売で働き通しで、胃ガンで、私が小学校4年生の時に亡くなりました。彼は天皇を仰ぎ、学生運動、市民運動には否定的でしたし、ロシア、朝鮮、中国、それから女性についても差別的なことを言っていたことを覚えています・・・。

最後に、「編集後記」で述べられた宗教と戦争責任についてですが、私の宗派も当時加担者でありました。私の寺では朝課で、「戦争殉難者精霊」として供養させて頂いております。これは私の師の意志です。でも、年輩の僧侶の中には、この「殉難」という言葉に抵抗のある人もおられるようです。戦時中は兵となった僧侶もおります。今でも自慢気に語る方もおられますし、

1994年活動報告

- 1月30日 『マリア信仰について』
講師 田川建三氏
- 3月10、17、24日（全3回）
鶴沼公民館「宗教のなかの女性史」
の講師（岡野、奥田、鶴岡）
- 5月14、21、28日
東京教区「女性と教会」委員会
『日本の女たちとキリスト教』
講座の講師（岡野、河野、奥田）
- 6月 例会 『「穢れた血」の近代』
井桁 碧さん
- 11月 例会 『ピューリタニズムと
女の性の自己決定』
近藤 和子さん

軍歌を懐かしそうに歌う人もおられます。私個人としては、そうしたことに対し批判もありますが、なによりも自分を含め、人間の愚かさを悲しく思います。他人との不必要な区別をつけ、自分を過大に評価したがる心はちょっとした隙を見つけてむくむくと成長して行きます。それが時として、大きな争いになっていくのではないかと思います・・・。

会計報告

（1995・2月末現在）

《収入》		《支出》	
前期繰越	161、207	印刷費	140、380
会費	243、000	ワープロ入力費	40、000
冊子売上金	49、630	送料	69、610
カンパ	11、600	文具	2、962
計	462、437	コピー代	860
		アンケート費用	19、350
		謝礼	5、000
		計	278、162
		現在高	184、275

編集後記

今年は戦後50年の節目の年である。この50年間、歴代政府をはじめとして、個々の政治家も官僚も、戦争・戦後責任をあいまいなままにしてきた。そのつけが、「従軍慰安婦」問題をはじめとして、今日さまざまな問題を噴出させ、アジアの諸国からの批判にさらされている。チエコの作家、ミラン・クンデラはこう言っているそうである。権力を持つ強い人間が民衆に対して使う常套手段は忘れさせることである。忘れさせてもう一度同じことをやらせようとするのが権力者のやり方である。それに対して弱い民衆の武器というのは記憶し続けることであると。わたしたちは少なくとも記憶し続けることによって、戦争・戦後責任を自分の問題としなければならないと思う。

そのような思いで、今号では戦後50年と宗教を取り上げた。もっと多くの方に書いていただきたかったのだが、今回は間に合わなかった方もあるので、この問題は次号に継続したいと思っている。会員の皆さん

の積極的な投稿を期待しています。

ところで、新聞で報道されたように、2月27日には衆議院で、28日には参議院で可決され、来年から7月20日が「海の日」として祝日になることになった。7月20日は明治天皇が1876（明治9）年に東北・北海道を巡幸して、横浜に帰着した日であり、それを記念して戦争中の1941年に「海の記念日」に決まった日である。一般の人にはそういうことはいっさい知らされず、日本船舶振興会など海事団体が強力に推進運動を進めてきて、あつという間に国会で成立してしまった。この日を祝日にしないために、私たちは内閣委員会の各委員に質問状を出したり、国会議員に働きかけたり、いろいろやってみたが、もはや手遅れであった。「国民の祝日」と言いながら、国民は蚊帳の外に置かれて法律がつくられていくプロセスに怒りを禁じ得ない。「海の日」に関する資料が必要の方は奥田まで申し込んでください。

新年度の会費（年3000円）をよろしく願います。
（奥田 暁子）

Womanspirit No.19

一九九五年三月発行

発行 フェニズム・宗教・平和の会

連絡先 〒180 武蔵野市関前5-5-25

奥田方

TEL FAX 〇四二二(五三) 八六四六

郵便振替 〇〇一七〇一九一八〇三一

定価 六〇〇円

印刷 旬オクノプリント社